THE YOMIURI SHIMBUN
讀賣新聞
2019年(令和元年)
6月9日日曜日
道支社 〒060-8656 札幌市中央区北4西4-1 電話(011)242-3111(代) www.yomiuri.co.jp

讀賣新聞
(第3種郵便物認可)

この道(みち) 31

青木 佑季(ゆき)さん 20

右手の指の数が、左と違う。友達のとも……。ぼんやり思うようになったのは、小学校に上がってからだった。でも、からかわれたり、いじめられたりしたことはなかった。「私の障害は軽いんです」。皮肉にもその「軽さ」に悩まされ、泣かされたこともある。

兄と姉との三つ子として札幌市に生まれた。生まれつき右手には親指と小指の2本しかなく、腕の長さも左に比べてやや短い。利き手は左手。あまり使わないため、右腕は肩周辺の筋肉が発達していない。先天性右手短合指症。3人のうち障害があったのは自分だけだった。

小学2年の時に母の由佳さん(55)から勧められたのが、母もやっていた卓球だった。腕の長さの違いによって体のバランスを崩しやすい面もあるが、ラケットは健常者と同じように利き手で自在に操れた。

兄と姉と一緒に始め、中学生になると、部活動とクラブチームの練習を毎日はしごするほど熱中した。姉と組んだダブルスでは地区大会で何度も優勝し、全道大会で3位になったこともある。いずれも健常者が出る大会で、「卓球は自分に障害があることを忘れさせてくれた」。

高校1年の時、国内の障害者大会で最高峰と言われる国際クラス別パラ選手権大会に出場し、優勝した。障害者大会への出場は母からもたびたび促されたが、「健常者と互角に勝負している私が、なぜ障害者大会でやらないといけないの」と拒み続けた。思春期の少女には、「障害」とみられることに抵抗もあった。

それでも出場したのは、母から相談を受けた卓球部の監督からも「絶対に出た方がいい」と押し切られたから。だが、初めて日本の頂点に立って、見える景色は大きく変わった。「世界を目指せ」。監督に言われ、「パラリンピックに出たい」という気持ちが一気にこみ上げた。

卓球の、そして自分の人生の目標がはっきりと見えた時、障害をさらけ出すことへの抵抗感はなくなっていた。

障害見せる 卓球で自信

パラ目標 モデル活動も

▲ 右手に障害があり、卓球でパラリンピックを目指す青木佑季さん(5日、札幌市清田区で)=川口正峰撮影

モデルとしてポーズを取る青木さん(所属事務所Co-CoLife タレント部提供)

2年前の夏、障害者卓球の日本代表候補に初めて選ばれ、国際大会が行われるスペイン・バルセロナにいた。パラリンピックに出場するために必要な国際大会の実績を積むためだった。大会のトーナメント表には、過去に勝ったこともある海外選手もいて、「メダルが狙える」と期待を膨らませた。

ところが、国際大会の初出場者に対し、障害者として出場する資格があるのかを判定する現地での審査で、「資格はない」との結果が下された。現地の医師の診断や実技試験によって10段階に分けられるものだが、最も軽い基準を示す「10」にも満たないとの評価だった。

目標にしていた2020年東京パラリンピックの夢はこの瞬間、閉ざされたことを意味した。母に国際電話で報告したが、涙があふれ、うまく言葉にならなかった。

昨年8月、東京の障害者専門のタレント事務所に所属し、モデルとしての活動を始めた。20年東京パラリンピックの開催が迫ってきたことで、国内で障害者モデルの需要が高まっているという。

東京大会では選手として光を浴びることはないけれど、「障害者スポーツの普及やイメージアップに少しでも貢献できれば」と今は思う。

まだ20歳の大学3年生。パラリンピック出場をあきらめるのは早い。国際大会の出場資格の審査は国や医師によって判断が変わる場合もあるといい、また時間をおいて受け直すことを決めている。

目標は24年パリパラリンピック。花の都で満開の笑顔を咲かせるために、挑戦を続けるつもりだ。

(井上雄太)

ご意見・ご感想は、ファクス(011・222・0490)、メール(hokkaido@yomiuri.com)へ。